

音楽作品の存在論的探求

—分析美学の観点から—

たなべけんたろう

田邊健太郎

本論文では、現代英語圏の美学（分析美学）においてなされている音楽作品の存在論的探究を検討することによって、理論間関係を明確にするとともに、それぞれの理論の問題点を明らかにし、その解決のための手掛かりを与えた。

第1章では、プラトン主義的タイプ説を取り上げた。プラトン主義的タイプ説は、プラトン主義的タイプの抽象的性格ゆえに、音楽作品の聴取をいかに扱うかという課題を背負っている。本章では代表的論者であるジュリアン・ドッドの理論を概観するとともに、彼の「抽象的対象は聴取可能である」ことを示す議論を批判的に検討した。

第2章では、指し示された構造的タイプ説を取り上げた。代表的な論者であるジェラルド・レヴィンソンは、創造可能性、音楽的 - 歴史的脈絡への依存、演奏手段の包含という観点から音楽作品の存在論的特性を考察し、音楽作品を「 t 時 - において - X - によって - 指し示されたもの - としての - 音 / 演奏手段の構造 (S/PM structure-as-indicated-by- X -at- t)」に同定する。本章では、指し示された構造的タイプという存在論的カテゴリーを認めるべきか、上述された音楽作品がいかにして創造されるのか、という観点からレヴィンソンの議論を検討した。

第3章では、歴史的個体説を取り上げた。ガイ・ローボウは、音楽作品が持つ様相的柔軟性、時間的柔軟性、時間性と調和する歴史的個体というカテゴリーを提唱し、音楽作品をそれに同定する。歴史的個体説に対しては音楽作品の反復可能性を説明しえないとする批判が存在している。本章では、音楽作品が反復可能であるとはどのような事態を指しているのかという点から、歴史的個体説とプラトン主義的タイプ説を比較考量した。

第4章では、音楽作品の反実在論を取り上げた。アンドリュー・カニアとロス・キャメロンはともに、音楽作品の特性を考えるならば、既存の存在論的カテゴリーには当てはまらないと考える。他方で彼らは、新しい存在論的カテゴリーを提唱せず、音楽作品は存在しないと主張する。反実在論は「存在論的コミットメント」に関わる問題を抱えることになるため、その問題に対する両者の対応（虚構主義とニヒリズム）を概観し、検討した。

An Inquiry concerning the Ontology of Music in Analytic Aesthetics

たなべ けんたろう

Kentaro Tanabe

In this dissertation, I examine the ontology of music in analytic tradition focusing on four theories—Platonic Type, Indicated Structural Type, Historical Individual, and Anti-Realism. And I make the relationship among these theories clear through four chapters.

Both type theories face the problem in virtue of type's abstract character—the audibility problem and the creatability problem. In ch 1, I examine Platonic Type Theory presented by Julian Dodd and argue against the argument which Dodd offered to defend audibility of platonic type. In ch. 2, I examine Indicated Structural Type theory presented by Jerrold Levinson and investigate whether Indicated Structural Type” is ontologically legitimate and if indicated structural type can be created.

In ch. 3, I examine Historical Individual Theory presented by Guy Rohrbaugh. Historical Individual is, at least on Dodd's criterion, not abstract so that the theory might be able to avoid the problems which trouble both type theories. However, historical individual theory must resolve another problem—how such theory address the repeatability of works of music. To solve this problem, I clarify what a repeatability of works of music is by analyzing the dispute between Dodd and Rohrbaugh.

In ch. 4, I survey Anti-Realism (fictionalism and nihilism) concerning works of music presented by Andrew Kania and Ross Cameron. I examine their arguments over “ontological commitment” problem and their solution to it.

Through this examination, I clarify the problems in each theory and offer suggestions to solve them.